

研究主題「読み書きに困難さを示す児童の学習意欲を高める授業の工夫 ー視覚認知機能の向上を通じてー」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
大田区立大森東小学校 教諭 鰐田 マリ

第1 研究のねらい

現在、通常の学級には発達障害の可能性のある特別な支援を必要とする多様な子供たちが学んでいる。私は、巡回指導教員として、学級担任と連携しながら、読み書きに困難さを示す児童の学びを支える指導の実践を重ねてきた。このような経験から気付いたことは、通常の学級担任は、児童の「読み書きの困難さ」を軽減させる適切な指導方法について困っているのではないかという点である。

文部科学省 特別支援教育 教育支援資料（平成25年10月）では、軽度の視覚障害の児童について、「視覚障害のある子供は、視覚の認識が不十分であることが多い。例えば、複雑な字形の漢字の読み書きや理科の観察等の視覚認知が必要な学習が十分にできなかったり、運動の模倣やボール運動がうまくできなかったりすることがある」と示されている。

また、同資料では、「視覚を通して得られる情報が不足したり行動が制限されたりすることで、限られた経験の範囲内で概念の形成を図ることになる」と示されており、視覚が学習を行う上で重要であることが分かる。視覚障害のある児童だけでなく、全ての児童一人一人に対して、読み書きを含む発達の段階を考慮した学習活動の基盤を充実させる必要がある。

そこで、「読み書きの困難さ」がある児童だけでなく、学級の児童全員に対して視覚認知機能の向上を目的とした活動を通常の学級に取り入れることで、どの児童も、文字をより正確に捉えられるようになり、学習意欲を高められると考え、本研究を進めることとした。

第2 研究仮説

特別支援教室において行われることがある視覚認知機能の向上を目的とした活動を通常の学級に取り入れることで、児童の読み書きの困難さが軽減され、学習活動に意欲的に参加できるようになるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 国における特別支援教育の動向について

中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（令和3年1月26日）では、「全ての教師には、障害の特性等に関する理解と指導方法を工夫できる力や、個別の教育支援計画・個別の指導計画などの特別支援教育に関する基礎的な知識、合理的配慮に対する理解等が必要である。」と示されている。

また、特別な支援を必要としている児童への指導として、小学校学習指導要領（平成29年告示）には、「効果的な指導が行われるよう、各教科等と通級による指導との関連を図るなど、教師間の連携に努めるものとする」、「障害のある児童などについては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行うこと」と明記され

ている。

(2) 視覚認知機能と学習意欲を高めることとの関連性について

視覚認知機能とは、眼で見た情報に合わせて、ものの位置や向きを認識する力であり、視覚認知機能の向上において、視覚と感覚機能、運動機能の関連が大事であると示唆されている。つまり、眼で見たものを正確に捉えられないと、正確に文字を読んだり書いたりできないことや、自分が思うように体を動かせないこととなり、学習の参加に影響を与えると考える。

2 調査研究

(1) 調査研究の概要

令和3年9月、都内公立小学校3校に所属する教員29人を対象に、質問紙により児童の「読み書きの困難さ」に対する意識調査を行った。また、検証授業前（10月）と授業後（12月）において、都内公立小学校第3学年に在籍する児童19人を対象に、「読みの困難さ」の実態として1分間に読める文字数、「書きの困難さ」の実態としてノートの文字について調査した。

(2) 教員対象の調査結果

「読み書きの困難さ」の要因はどのような影響によるものかという質問については、「知識や知覚、記憶、学習の影響」が最も多い回答であり、次に多かったのは「視線が定まらないことによる影響」という回答だった。（表1）

また、ほとんどの教員が児童の「読み書きの困難さ」が学習意欲に大きく関わっていると回答した。さらに、「読み書きの困難さ」に対する教員の主な支援方法は、児童の状況に応じた個別支援が多かった。

例えば、「読みの困難さ」では、指で文字を追わせるように伝える、音読を個別の課題として出す、教員が範読した後を読むように伝える方法、「書きの困難さ」では、大きなマスのノートを使用するように伝える、正しい文字を確認し書き直すように伝える、下書きをなぞらせるように伝えるという方法が多かった。これらの結果から、教員は児童の「読み書きの困難さ」の要因が「視線が定まらないこと」であると気付いてはいるが、支援方法は個別支援が多く、特に児童の「読む」、「書く」等の技能を直接的に改善しようとする内容が多いことが分かった。

そこで、教員が学級全体で児童の視覚認知機能の向上を目的とした活動を行うことが必要であると考えた。

3 開発研究

(1) 児童の実態に基づいて、具体的な支援方法が分かるフローチャートの開発

教員が児童の実態に基づき、具体的な支援方法を知ることができるフローチャートを『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント」等（平成29年3月 東京都教育委員会）を参考にして作成した。学級担任がこのフローチャートを活用することで、学級全体の支援を行えるようにした。

(2) 具体的な支援を計画できる年間のプログラム（例）の開発

表1「読み書きの困難さ」の要因（複数回答）

読み書きの困難さの要因（n=29）	合計
知識や知覚、記憶、学習の影響	26
視線が定まらないことによる影響	17
聞くことの影響	16
集中力の影響	12
記憶力の影響	12

通常の学級で担任が各教科等の授業の導入時や学級活動の時間帯等で取り組むことができる年間プログラム（例）を作成した。学級の実態に応じて必要な活動を選択し、巡回指導教員と連携しながら具体的な支援を行うことで、児童の「読み書きの困難さ」がより軽減できると考えた。

4 検証授業

令和3年11月、都内公立小学校第3学年に在籍する児童19人を対象に、国語科「俳句を楽しもう」において実施した。児童が、眼で文字を正確に捉えられるように、授業の導入時に「眼の体操」を取り入れたり、「教員の動作をまねる体操」を取り入れたりすることで、児童の読み書きの困難さが軽減され、学習に意欲的に参加できるようになったかを検証した。

(1) 検証授業までの手だて

検証授業に至るまでに、学級の児童の実態を確認したところ、自分の体を動かすことに課題があることが分かった。自分の体を動かすことに苦手さがあると、文字を正確に捉えて読むことや文字の大きさを整えて書くことが困難になると推察できた。そこで、「フローチャート」により支援方法を確認し、学級の児童に対して、1か月間、自分の体を動かす取組として、次の二点の活動を学級担任が行った。

第一に、児童が見たものを正確に眼で捉える力を育てるために、授業の導入時や学級活動の時間を活用して、毎日、3分間程度の「眼の体操」を行った。

第二に、児童の微細運動及び運筆運動ができるために、体育の準備運動で「教員の動作をまねる」活動を行った。これは、教員の動きを眼で正確に捉え、眼からの情報に合わせて教員の動きと同様の動きを行う活動である。

(2) 検証の内容

ア 「読み書きの困難さ」の軽減については、児童の「言葉のまとまりとして正確に捉え音読する姿」、「ワークシート等に文字の形を整えながら記載する姿」から検証した。

イ 学習意欲の高まりについては、児童の「知っている言葉を手掛かりに俳句の情景を想像し、リズムや言葉の響きを楽しみながら音読する姿」、「言葉の響きやリズムに親しみながら音読する姿」から検証した。

(3) 児童の変容について

ア 「読み書きの困難さ」について

検証授業前（10月）に、児童の「読みの困難さ」の実態を把握するために、1分間に読める文字数を調査した。

課題文は、漢字、特殊音節、カタカナが含まれている、1学期に学習した物語文とした。普段の

授業で使用している課題文として設定することで、通常の学級で担任が、いつでも「読みの困難さ」を把握できるようにした。調査の結果、1分間に読める平均文字数は298.5文字であった。また、個々の児童の読み方を観察すると、学級の児童全員に「文末を変えて読む」、「助詞を抜かして読む」、「言葉を変えて読む」等の実態が見られた。

検証授業後（12月）に改めて調査したところ、1分間に読める文字数の平均は303.6文字

都内公立小学校3年生 読みの実態（n=19）	
課題文「きつつきの商売」	
検証授業前	検証授業後
298.5 文字	303.6 文字

図1 児童の「読みの困難さ」の実態

であり、5.1 文字増えた。(図1) 児童が音読する姿を観察すると、眼を滑らかに動かして教科書を読んでおり、「文末を変えて読む」、「助詞を抜かして読む」等の児童が減少した。

また、「書きの困難さ」は、ノートの文字について次の3観点で調査を行った。

- (ア) ノートのマスの中に文字を書くことができるか。(図2)
- (イ) 漢字のへんやつくりを正確に書くことができるか。(図3)
- (ウ) 文字をバランスよく書くことができるか。(図4)

以上の観点について検証授業後に調査を行い、全ての観点において改善が見られた。

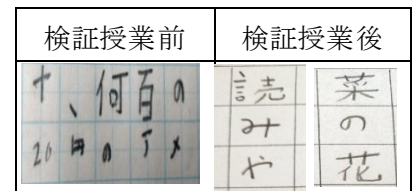
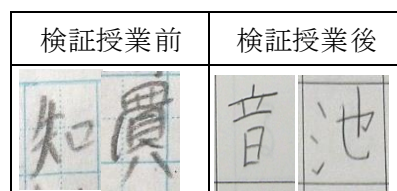
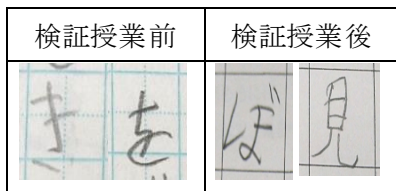


図2 ノートのマスの中に文字を書く 図3 漢字のへんやつくりを正確に書く 図4 文中の文字をバランスよく書く

イ 学習意欲について

授業では、導入時に眼の体操を行い、俳句を五・七・五に区切って音読した。児童からは、俳句を音読している中で、「なめらかで、ゆっくりとした感じだ。」等俳句の読み方について考える発言があった。ワークシートには、「読みやすかった。」、「初めて聞いた言葉だけど、言いやすかった。」等の記述が見られた。言葉のまとまりを正確に捉えた児童は、言葉の響きやリズムに親しみながら音読していた。また、お気に入りの俳句を選び、理由を考える活動を行った。児童からは、「蛙が古池にポチャッと入った。」、「古い池だから、草がたくさん生えている。」等の発言があった。ワークシートには、『蛙飛びこむ』のリズムがよかった。」等の記述が見られた。検証授業前は、言葉から情景をイメージすることができず、自分の考えを伝えることが難しい様子だったが、検証授業後は、言葉から情景をイメージし、自分の考えを伝える姿が見られた。

検証授業後、学級担任からは、「検証授業前と比べて、言葉を正確に捉え音読したり、教員の発問や問題文に対して、正しく回答ができるようになったり、漢字も正確に書けるようになったりしているなど、児童の『読み書きの困難さ』が軽減しており、児童の学習意欲が高まったと感じている。」との感想があった。

第4 研究の成果

特別支援教室において行っている視覚認知機能の向上を目的とした活動を通常の学級に取り入れたことで、児童の「読み書きの困難さ」が軽減され、児童の学習意欲の高まりにつながった。

第5 今後の課題

児童の「読み書きの困難さ」が軽減され、児童の学習意欲の高まりにつながったことが分かったが、児童の学習内容の定着につながるかについては分かっていない。よって、今後検証する必要がある。そのために、一年間を通じて「読み書きの困難さ」を軽減する活動を学校全体で行っていくことを提案していく。